知的障がい児の社会性の実態把握
－社会的手抜きを通して－

学籍番号　229503
氏　名　立石 友花
主指導教員　大内田 裕
副指導教員　西山 健

１．本研究の背景と目的

障害者雇用の促進等に関する法律の改正によって、障害者の雇用者数が年々増加しているが、職場定着率は低くなっている。その要因のひとつとして仕事と採用者の特性のマッチングの問題がある。特別支援学校高等部を卒業した生徒が就労する割合も年々増えていることから、学校が、仕事における生徒の特性や強みを知り、最も良いパフォーマンスを発揮することができる環境を就労先に伝えることが必要であると考えられる。

一般的に、多くの知的障がいのある人は、社会性の課題を抱えており、様々な状況でこの社会性の問題により不利益を被ることが多い。社会性の問題は、早期離職の要因にもなっている。しかし、状況によってはこの社会性の問題が、良い効果を生み出すこともある。本研究では、知的障がい児の社会性を「社会的手抜き」を利用して、行動から直接評価することとした。そこで、本研究では知的障がい児には、定型発達者に見られる社会性があるがゆえに生じる「社会的に手抜き」行動がどの程度生じるのかを調べることを目的とする。また、測定した手抜き指標と他の検査で測定した指標との比較から、社会的手抜きに強い影響を持つ因子を調査することとした。知的障がい児に社会性の問題があることにより社会的手抜きが見られなければ、「周囲の状況や環境の変化に左右されずに作業を進めることができる」という就労における強みになるのではないかと考えた。

２．実践内容

対象は、知的特別支援学校中学部に在籍している11名の生徒（実験群）と、年齢を合わせたA中学校在籍の定型発達の12名の生徒（統制群）を対象に、社会的手抜き行動を定量化し単純作業を用いた実験を行った。単純作業課題は、1分間、A5サイズの用紙の特定の位置に正確にできるだけ多くのシールを貼る課題で、1人で課題に取り組む「1人条件」と、社会的手抜きが起こりやすい状況である複数人で課題に取り組む「グループ条件」の２条件を設定し、被験者全員が行った。また、実験の結果をS-M社会生活能力検査の結果・自閉症指数と比較し、関連している特性を検討した

３．結果と考察

実験の結果、知的障がいのある生徒と定型発達の生徒の間には、社会的手抜きに関しては、量的に差が見られなかった。ただし、知的障がいのある生徒は、社会的手抜きが強く見られる群（5名）と社会的手抜きが見られにくい群（6名）の2群に分けられることがみてとれた。結果のばらつきについては、知的障がいのある生徒の実態が多様であったことから起こったと考えられる。本研究では実験群の被験者を「知的障がい」とひとくくりにして考えていた。しかし、11名の中には単一障害の生徒だけではなく、知的障がいと自閉症スペクトラム・注意欠陥多動性障害などを併存している生徒等、多様な実態の生徒がおり、知的障がいの程度もさまざまであった。このことから、結果に大きなばらつきが生じたと推測することができる。

社会的手抜きとS-M社会生活能力検査の結果・自閉症スペクトラム指数との比較については相関が見られなかった。このことは、今回扱ったS-M社会生活能力検査・自閉症指数の両方が質問紙形式であることが原因で生じたと考えられる。本研究で行った実験では、一般的に行われている知能検査のように、被験者に課題を提示してその結果を直接評価したが、S-M社会生活能力検査は全て保護者の回答が結果に結びついているため、学校以外の様子から見た総合的な判断が含まれている。また、自閉症指数は本人と担任の教員の回答であるため、結果は概ね本人の回答によって出ているものであるが、他者の見立ても含まれている。質問紙の回答に関しては回答者の主観的な判断をなくすことができないため、結果に相関が見られなかったものと考えられる。

一方で、社会的手抜きが起こりにくい被験者6名は、個人の間で比較したときに自閉症指数のコミュニケーション領域で自閉症傾向を示す回答が多い傾向にあった。また、共通して質問項目「誰かと話をしているときに、相手の話の‘言外の意味’を理解することは容易である。」・「自分の話を聞いている相手が退屈しているときには、どのように話をすればいいかわかっている。」について、自閉症傾向を示す回答をしていた。比較的社会的手抜きが起こりにくい被験者が、共通して他者の気持ちや直接は言葉に出さない部分の意味を推測する項目に難しさを抱えているということは、「心の理論」（他者の意図や心理状態について推測する能力）の成立が少なからず関係していると推測することができる。

これらの結果から、一部の知的障がい児には社会的手抜きは起こらないことが明らかになり、強みとなり得る特性であることがわかった。また、社会的手抜きは、他者の言語的・非言語的コミュニケーション能力と強い関係があることから、コミュニケーションの課題は社会的手抜きが少ない人の特徴のひとつとして考えることができるだろう。しかし、社会的手抜きが強く見られる群と社会的手抜きが見られにくい群を分けると言い切ることができる明確な特性を明らかにすることはできなかった。